モダニティのグローバリゼーション論に向けて
―社会学の存在論的、認識論的前提に対する批判的検討から―

長崎大学　首藤　明和

はじめに

今日の社会学の概念や理論が、グローバリゼーションにおける問題の発見や、そうした問題の説明、将来の予測、さらにはそれら問題の解決に向けた実践において、いかなる困難や可能性を抱えているのだろうか。こうした問題について本稿では、社会学のメタ理論や、その土台を構成する認識論的、存在論的な前提への批判的検討を通じて考察したい。ただし紙幅の制限上、グローバリゼーションを分析する上での社会学のプロブレマティークを部分的に提起するだけで、課題と展望の予備的な方向付けを提供するにとどまる。

まず第１章では、グローバリゼーションを捉えるための作業仮説を提示したい。すなわち、「グローバリゼーションとは、地球規模での時空における、モダニティの徹底化である」ことを作業仮説として提示する。そして、「モダニティのグローバリゼーション論」の輪郭を整理しておく。第２章では、「モダニティのグローバリゼーション論」において、行為と制度を総合的に捉える必要があることを、主にＡ．ギデンスの所論に拠りながら整理する。第３章では、「モダニティのグローバリゼーション論」が抱えるプロブレマティークを整理し、その解決に向けた方法を考察する。すなわち、主に西原和久の所論に拠りつつ、制度と行為を総合的に捉えるための方法を、存在論的に〈生〉にかかわる行為と、それに基盤を置いた制度化のあり方から考察する(1)。

１．モダニティの徹底化としてのグローバリゼーション

以前、拙稿において、主にＡ．ギデンスの *Consequences of Modernity*（『近代とはいかなる時代か』）（1990）、厚東洋輔『モダニティの社会学』（2006），同『グローバリゼーション・インパクト』（2011）の議論に基づき、モダニティの徹底化という視点からグローバリゼーションの分析を試みた（首藤 2012）。ここでの議論をさらに展開しつつ、本章では作業仮説として「グローバリゼーションとは、

地球規模での時空における、モダニティの徹底化である」ことを掲げ、次章以降の「モダニティのグローバリゼーション論」における社会学のプロブレマティークの整理へとつなげたい。

モダニティとは、およそ17世紀以降の西欧に出現し、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった生活や社会組織の様式のことである。ギデンスは、このモダニティを適切に理解しようとするならば、モダニティが制度面で多くの特性を示すこと、極度のダイナミズムを有すること、範域のグローバル化をともなうこと、伝統文化との非連続性が顕著なことを解明しなければならないという（Giddens 1990: 1-17=1993: 13-31）。

ギデンスに拠れば、モダニティの分析には、大別して、「モダニティの諸制度を形作る支配的な力の解明」と「モダニティの基盤となる複数の制度特性とその相互関係の解明」があるという。しかし、社会学のほとんどの理論は、近代社会における支配的で単一の制度を探し求める傾向にあった。ギデンス自身は、後者の重要性を唱え、分析すべき複数の制度特性として、「資本主義」（競争に基づく労働市場や商品市場での資本蓄積）、「軍事力」（戦争の産業化の下での暴力手段の管理）、「監視」（情報管理と社会的監視）、「産業主義」（自然界の変容＝「創出環境」の発達）を挙げている（Giddens 1990: 55-63=1993: 75-84）。

この二つのモダニティに対する分析視角に加えて、筆者は、「モダニティの変容のパターン」への着目が、グローバリゼーションの分析では欠かせないと考える。なぜなら、モダニティを自生的に生み出した西欧の経験と、モダニティが外からやってきた非西欧の経験とは、モダニティの変容パターンに根本的な違いが認められるからである。厚東がいうように、従来の社会学は、研究者自らの問題関心に基づいて、環境に対して閉ざされた何らかの範域性や自己充足性をもつ〈社会〉とその〈文化〉を措定し、ここに内在的な要素から社会の変動を描こうとする傾向があった。これは内発的発展論としての社会変動論といえる　（厚東 1995, 2011：75-112）。当然、ここから派生する分析上の射程と限界は、グローバリゼーション論の構想においても、批判的に検討しなければならない。

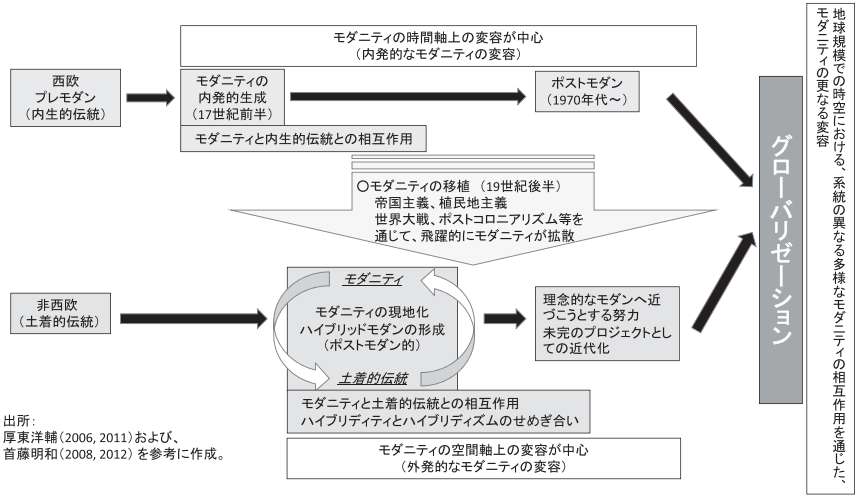
19世紀、モダニティは、それを生み出した西欧の文化的個性を自ら脱ぎ捨てていくのと並行して、首尾一貫性に支えられたシステムとしての完成度を獲得し、欧米全体へ普及していった。さらに、20世紀の２度の世界大戦は、欧米を越えて全世界にモダニティが伝播する大きな契機となった。19世紀後半から現在に至るまで、非欧米は、帝国主義による侵略や植民地支配、戦後のポストコロニアリズムを経験し、暴力装置、資本、近代的理念などを媒介にした（旧）宗主国との非対称的関係のなかに置かれてきた。そして、そのなかで、欧米から非欧米へのモ

ダニティの移植や現地化が行われてきたのである。それゆえ、世界大戦、帝国主義、植民地主義、ポストコロニアリズムなどは、本格的なグローバリゼーションの前段階、すなわち、モダニティの未だ徹底しない伝播と、モダニティの一部の地域での現地化を経験した段階として位置づけられる。その後、さらに20世紀後半になると、モダニティの伝播は一層加速化するとともに地球上の至る所でモダニティと土着のもの（伝統的なもの）との相互交渉、相互作用は不可避となり、グローバリゼーションの浸透が徹底化していく（厚東 2006, 2011）。

「モダニティの変容のパターン」は厚東の議論に拠れば次のようになる。まず、20世紀最後の四半世紀は、モダニティを自生的に生み出した西欧で、モダニティが徹底化することでモダニティそのものが自己変貌を遂げ、その結果、ポストモダンが成立した時期である。いわば、西欧における近代経験は、「時間軸上におけるモダニティの変容」と捉えられる。モダニティの自生的な生成からモダンの進化、そしてポストモダンへと至るポストモダン論は、西欧の先進諸国の経験から作り上げられた変動図式であり、自己理解の試みである。モダンからポストモダンへの移行では、その原動力としてモダニティに特有な内的矛盾や内的葛藤が強調される。例えば政治的モダニティでは、中央集権化（国家主権の浸透）と民主化（在民主権の浸透）が激しくぶつかり合い、矛盾や葛藤をともないながら、モダニティそのものの自己変貌として第三項としてのナショナリズムを生み出し、国家と国民を媒介しつつ総合していったことなどである。

他方、非西欧へのモダニティの伝播を通じて、モダニティの変容には別のパターンが生み出された。それを厚東は、モダニティが移植先の文化や歴史と相互交渉を経るなかで蒙る変質として捉えた。こうした非西欧における近代化経験は「空間軸上におけるモダニティの変容」として捉えられる。非西欧では、モダンの伝播とともに近代が開始した。その近代化経験は、現地の文化や歴史との相互交渉を経ることで、当初からポストモダン的な性質（非決定性、アナーキー、散逸化、模倣、虚構、表層など）をともなっていた。それゆえ非西欧での近代化は、ポストモダン的な状況から、理念的なモダン（決定性、ヒエラルヒー、中心化、独創性、存在、奥行など）へと近づける努力に彩られてきた。そして、その努力が成就する前に、あるいはそうした努力を払うことに疑念が高じてきたところに、本格的なグローバリゼーションの時代へ突入したといえる。こうした非西欧の近代化経験は、西欧の経験に基づく近代化論やポストモダン論からは十分に説明できない。それゆえ、「空間軸上におけるモダニティの変容」を主とする社会に対しては、ハイブリッドモダン論による自己理解が試みられたりする。

昨今のグローバリゼーションは、時空におけるモダニティの徹底化として捉え



（図１）時空におけるモダニティの徹底化としてのグローバリゼーション

ることができる。グローバリゼーションでは、「時間軸上におけるモダニティの変容」と「空間軸上におけるモダニティの変容」の両パターンが併呑され、モダニティを媒介として、西欧と非西欧の相互作用は未曾有の深化を経験している。グローバリゼーションの本格化にともない、「時間軸上におけるモダニティの変容」の優位性は揺らぎ始めている。西欧は、かつてのように「時間軸上におけるモダニティの変容」だけから自己理解をすることはできない（厚東 2006, 2011）。グローバリゼーション論は、地球規模での時空におけるモダニティの徹底化に焦点があり、それゆえ、西欧の経験や形而上学に根ざした近代知の脱中心化を進める可能性を秘めている。

以上より、モダニティの分析は、グローバリゼーション論においても中枢を占めることが理解できる。すなわち、従来の社会学におけるモダニティの分析では、（１）「時間軸上におけるモダニティの変容」の分析（モダニティの内発的発展論）と、（２）「空間軸上におけるモダニティの変容」の分析（モダニティの外発的発展論）が中心的であったが、その一方で、「モダニティのグローバリゼーション論」では、（３）それら両パターンの併呑から生じる、「地球規模での時空における、系統の異なる多様なモダニティの相互作用を通じた、モダニティの更なる変容」に対する分析に力点が置かれる。そして、(a)「モダニティの諸制度を形作る支配的な力の解明」と、(b)「モダニティの基盤となる複数の制度特性とその相互関係の解明」という課題に、（１）、（２）、（３）のモダニティ変容パター

ンをそれぞれクロスさせることで、「モダニティのグローバリゼーション論」は、グローバリゼーションの歴史や比較に対する分析枠組みも確保することができるのである[2]。

2.「モダニティのグローバリゼーション論」における行為と制度

既述のように、グローバリゼーションを時空におけるモダニティの徹底化として捉える「モダニティのグローバリゼーション論」では、モダニティの諸制度に支配的な力や、諸制度の特性とその相互関係に対する解明が、欠くことのできない分析課題のひとつであった。こういった制度への着眼に加えて、本章ではさらに行為へと視野を広げていく。そして、行為と制度の関係に関する考察へとつないでいくことで、グローバリゼーション論での社会学のプロブレマティークを明らかにしていきたい。

制度と行為をどう取り扱うかは、社会学の前に長らく立ちはだかってきた基本的争点のひとつである。A．ギデンスの *New Rules of Sociological Method*（『社会学の新しい方法規準』）（1976）は、この論理的争点の解明を試みた、今となっては社会学的古典ともいえる、そして未だに多くの示唆を期待できる研究のひとつである。主にこのギデンスの所論に拠りながら論を進めていこう。

ギデンスは「社会理論では行為を、人間という行為主体によって再帰的に秩序づけられ、合理化された行動とみるべきである」という（Giddens [1976] 1993: viii =1987: 5）。また、「社会は、はっきりと説明するのは決して容易ではない意味合いにおいて、人間という主体が意識的に用いるスキルの結果である」（Giddens [1976] 1993: 20=1987: 13）と述べたり、「社会の（相応な能力の）成員とはいずれも実際の経験から学んだ社会の理論家であるがゆえにこそ、《社会の生産》は現実に可能となる」（Giddens [1976] 1993: 20=1987: 14）と述べたりする。ギデンスが、社会をその成員の行いによって能動的に構成されるものとみなしていることは明らかである。それは、ギデンスの方法論的立場というよりも、さらに強い意味合いで、人間にかかわる存在論的前提としてあるといえよう。

それゆえ、実存主義的現象学や日常言語哲学などが、社会生活の脈絡における行為や意味、慣習への関心を再生させてきたことに、ギデンスは高い評価を下している。ただしその一方で、この現象学や言語哲学に対して、「制度的変化と異文化の媒介の問題がまさに始まるところで頓挫してしまう相対主義に、結局は終わってしまう」（Giddens [1976] 1993: 23=1987: 17）と言い放って憚らないのもギデンスである。すなわち、行為と制度は、ミクロやマクロといった安易な学問的

分業のなかで論じられる問題などではなく、むしろ本来的に総合的に論じられなければならない。この総合の問題は、社会学の長きにわたる争点であるとともに、モダニティのグローバリゼーション論でも主要なプロブレマティークを構成している。行為と制度を総合的に論じるためのポイントをギデンスの議論から 2 点に絞って整理しておこう。

第一に、「意味と経験の相対性の原理」（principle of relativity of meaning and experience）の確保である。そのためには、意味の理論における経験主義や論理的原子論からの離反が必要である。しかし現状は、個別に分離された意味の世界の強調が、意味と経験の相対性の原理を「相対主義」（relativism）の悪循環に陥らせており、意味変化の問題を論じるのを不可能にさせている。重要なのは、意味の世界を、他の意味や経験から媒介された世界と捉えることであり、決してそれを自己完結したものとみなしてはならないことである。そして、社会の一般の成員は、ルーティン化したかたちで、言語と経験からなる異なる秩序の間を変転していくスキルや能力をもつことを見据えなければならない。例えば、言語学でいう「言語ゲーム」の学習や「生活形態」（form of life）への参加は、その生活形態とは異なる他の生活形態について学ぶなかで生ずる。したがって、ある文化に精通するとは、発育ざかりの幼児や異邦人の観察者や訪問者のように、表象や手段、象徴などで言語の間を移動するなかで、そうした言語の媒介するものごとを把握するようになることである（Giddens [1976] 1993: 23-24=1987: 17-18）。

第二に、「社会的（および言語的）基盤としての再帰性という考え方」の徹底である。このことは、「理解」（Verstehen）が、理解社会学などでは人間研究の「方法」として捉えられてきたが、そうではなくてむしろ、社会における人間生活の存在論的条件にほかならないことと結びつく。日常言語哲学や実存主義的現象学がいうように、自己理解は他者理解と不可分に結びつく。自分のおこなうことの理解は、他の人びとのなすことがらの理解によってのみ可能であり、また逆に、他の人のなすことがらの理解は、自分のおこなうことの理解によってのみ可能となる。それゆえ現象学的意味での「志向性」（intentionality）とは、コンテキストに依存した言語の有するコミュニケーションの範疇に必然的に依拠し、そしてその言語は、明確な生活形態の存在を前提とする。再帰性やそれに依拠した理解は、記述ができることによってのみ可能となり、実践的な社会的活動の媒介手段である言語の社会的性格と密接かつ不可分に結びつく（Giddens [1976] 1993: 24-25=1987: 19-20）。

この再帰性は、言語に典型的に見いだせるような「社会的性格」、すなわち、相対性や「構造の二重性」（duality of structure）（Giddens 1979: 5）、「二重の解

釈学」（double hermeneutic）（Giddens 1976: 86）などと結びついている。「人類の示差的な属性としての再帰性」（Giddens [1976] 1993: 25=1987: 20）を標榜するギデンスは、再帰性が社会的基盤にあり、行為者によって社会が構成されると同時に、社会によって行為者が構成される関係を強調する。行為と制度は、再帰性を媒介にして統合される。

これらの視点は、デュルケム（Durkheim 1895）やパーソンズ（Persons 1949, 1951）といった機能主義への批判とも重なり、価値や規範、権力、解釈などをめぐる行為と制度に関連して、いくつかの知見をもたらしている。例えば、機能主義は、「価値の内面化」などとして、社会から人間へと関係を一方向的で一元的に還元してしまう。しかしむしろ肝要なのは、社会は行為によって能動的に構成され、同時に行為は社会によって構成される、「生産と再生産」という「構造の二重性」への着眼である。また、規範ないし価値といった制度を、孤立した状態のまま、社会的活動の（それゆえ社会理論の）もっとも基本的な特徴としたために、権力を副次的な現象とみなしてしまっていること、それゆえ、規範の解釈をめぐっては、利害関心とも関連して相争うことが不可避的に生じるはずのところが、機能主義ではむしろ、規範のもつ交渉された性質を概念化することに失敗していると批判している（Giddens [1976] 1993: 26=1987: 22）。

3．「モダニティのグローバリゼーション論」の課題と展望

ギデンスは機能主義を厳しく批判した。しかしその一方で、社会学の基本概念の体系的整理では、社会現象にみられる事実上の規則性に着目していくつかの次元にまとめておくことが、結局、行為と制度の総合的理解に基づくモダニティのグローバリゼーション論を組み立てる上での近道になる。塩原勉がパーソンズの議論を要領よくまとめているので（塩原 1985）、それを参考にして〈社会的行為―社会関係―社会集団―社会制度―全体社会〉というシリーズを図式化し、その上で、先のギデンスによる批判も念頭に置きつつ、モダニティのグローバリゼーション論の課題と展望をみていくことにしよう。

まず、もっとも要素的で微視的な次元は〈社会的行為〉である。そのひとつ上の次元は〈社会関係〉である。〈社会関係〉は、他者の期待をめざす相互行為、つまり社会的相互作用のパターン化したものである。さらに上の次元は、複数の社会関係の複合化した統一体としての〈社会集団〉であり、その上の次元は、複数の社会集団を統一化する〈社会制度〉、最後のもっとも包括的・巨視的な次元は〈全体社会〉である。これに対して、社会的行為の相互期待に応じてパターン

化したものは〈役割〉と呼ばれ、複数の役割が共同目標をめぐって調整されたものが〈組織〉と呼ばれる。そこで〈社会的行為―役割―組織―社会制度―全体社会〉という、先のシリーズとは互換的な関係にあるシリーズが考えられる（塩原 1985：19-20）。

社会的行為に相互期待という特性が加わって、社会関係および役割が生ずる。社会関係および役割は共同目標をめぐって複合化され結び合わされることで、社会集団および組織が存立する。そして社会集団および組織が、社会規範によって複合化され結び合されるとき、社会制度が存立する。最後に、複数の社会諸制度が社会的価値によって統合されるときに、全体社会が姿を現す。相互期待、共同目標、社会規範、社会的価値は「創発特性」（emergent property）と呼ばれ、創発特性が付加されることで、ある現象の次元は一つ高い次元へアップする。その一方で、それぞれの創発特性は低い次元へ分節化しつつ特定化されてゆく。例えば、社会規範→組織規範→役割規範→行為規範というように特定されていく。このようにしてミクロで要素的な現象とマクロで包括的な現象は、相互浸透しあって全体性をつくりあげている（塩原 1985：148-149）。

さて、モダニティのグローバリゼーション論について、課題としてまず頭に浮かぶのは、時空におけるモダニティが徹底化し、人・モノ・情報などの越境的移動とそこでの相互行為や相互作用が日常化するなかで、この創発特性の“発生”をどう説明したらよいかという問題である。特に越境的移動の現場において、価値や規範は、社会から人間へと一方的、一元的に向かう「内面化」という関係に還元して説明することはできない。このことと関連して、社会規範や社会的価値などで想定されている「社会」、すなわち、範域と領域的秩序をもった「社会」とは、いったい何を意味するのかという問題もある。当然、越境的移動では、言語共同体や道徳共同体、信仰共同体などの「社会」が、国民国家やエスニシティ、階級・階層、地域や組織、社会関係や社会的行為などといったマクロからミクロに至る「社会」とクロスして、相互行為や相互作用の条件、状況を構成する。価値、規範、目標、期待などの創発特性の発生を、ある特定の「社会」がもつ範域や領域的秩序に回収した形で論じることは、自明な根拠に基づく正当な方法であるとはいえない。むしろ、グローバリゼーションにおける創発特性は、既存の「社会」の範域や秩序を揺さぶる形で発生している場合も多くみられるのである。

モダニティのグローバリゼーション論における、さらに核心的なプロブレマティークは、相互行為や相互作用を通じて発生した価値や規範などの“制度化”にかかわっている。この問題について、例えば西原和久『自己と社会』（2003）は、制度と行為を、発生を媒介にして統合していく視座をもつ。すなわち、制度

は、それを継続的かつ結果的に実現させている制度化という時間のなかでの相互行為連鎖による相互実践がなければ存立しないこと、制度が理念的なものとして存立しうるのは、相互行為状況での〈生〉にかかわる反復的行為にもとづく「ヤリ―トリ」という〈物質的〉なもののなかにしかないこと、〈理念的〉なものとして制度を把握するさい、物象的あるいは表象的に記憶し予期していくことに影響を与える言語的な象徴性の問題を避けて通れないこと、その言語的シンボルの生成それ自体が、一種の制度化、つまり相互行為とその関係性の問題（第三項・第三者の問題や「我々」を語りうる権利にかかわる問題）としてあることなどを主張する（西原 2003：251-252）。

この「ヤリ―トリ」という相互行為は、存在論的な〈生〉にかかわって捉えられている。すなわちそれは、人びとが生き、相互に実践し合う、関係の場であり情動の場である。さらには、協働連関をなす間身体的な場である。そこには一定の差異を生み出す類型化的な分節がみられ、リズムやエロスの交錯、身体的な力（暴力）などが飛び交う〈原社会的空間〉とされる。そこでの行為の「ヤリ―トリ」において、すでに原初的な役割の分化（および原初的な時間意識の生成）がみられ、互いにとっての相手の存在が前提にされている。ただし、明確な自己意識は未成立で、当事者意識のなかで自他未分の様相が呈されている。この未分状態がうち破られる契機として、現前の自他の占める空間の差異、自他の場所的パースペクティヴの相違があり、次に、現前の自他間の身体物理力による能動態―受動態の感受があり、最後に、そうした「ヤリ―トリ」にみられる時間の問題がある。こうした差異が、〈自己〉ならぬ〈他者〉の覚識に通じ、〈ここ〉ならぬ〈そこ〉の〈他者〉の行為に対して、一定の情動をともないながら、先に、あるいは同時に、あるいは後に、〈自己〉の行為を接続していく。それが「ヤリ―トリ」の原基とされる（西原 2003：249-250）。

この西原の所論に加えて関連する研究にも触れながら、モダニティのグローバリゼーション論の課題と展望を、行為と制度を焦点に整理して、本稿のまとめとしたい。

西原のいう行為は存在論的な〈生〉にかかわっており、そこでの時間的な反復や物質的な再生産が行為の基盤にある。行為の時間的な反復は習慣性の前提を形づくり、それが相互行為の習慣化や、制度化へとつながっていく。

また西原は、シュッツが『社会的世界の意味構成』（1932＝2004）において、自己と他者が時空を共有する「共在世界」（Umwelt）と、自己と他者が時間のみを共有する「同時世界」（Mitwelt）を挙げ、共在世界での対面的他者の理解が他者理解の原型をなし、同時世界では類型的な他者理解が特徴的だとしたこと

を受けて、共在世界における前言語的な「間身体的現実」と、ここでの「共振する仕方でリズムを共有すること」に、制度の発生や生成の基盤を見出している（西原 2003：144-145）。

もちろん、前言語的な身体的共鳴だけを強調することは、実際に言語が現実構成に大きな力を発揮することを見落としてしまう。また、筆者自身は、フィールド調査において、共在世界における民族間での身体的リズムの接触が、むしろ他者への憎悪や否定を引出してしまう現実があることを見聞しており（首藤 2017）、理論に潜む誤謬の不可避性を痛感している。しかしそれでもなお、〈生〉に根ざした対面的な相互行為への着眼は、例えば異なる国民道徳や宗教道徳を背景にもつ人びとの相互行為が、いかなる価値や規範を生み出し、またそうした創発特性がどのように制度化されていくのか、さらにはそうした動きに権力や資本などがどうかかわってくるのかなど、モダニティのグローバリゼーション論における重要な論点を明示するのである。

また、制度化の原初に、前人称的で前言語的な人としての身体がおこなう知覚を強調したメルロ＝ポンティの所論などは、やはり存在論的に〈生〉にかかわる行為を扱ったものである。身体を介した自己の構造化と世界の構造化の二重性を主張したメルロ＝ポンティは（Merleau-Ponty 1969=1979 : 69）、制度化の基盤に自と他の分別を包含する「理性的認識」（抽象的推論）を置かず、むしろ抽象的推論を包含しない知覚に置いた。知覚を通じた、他者の意識と自身の意識の同時性の持続化は、自他の共時化の「自覚的体験」や共在世界の構成につながり[3]、価値、規範、目標、期待といった創発特性を制度化していく基盤を提供する。

このように、西原やメルロ＝ポンティの議論は、ギデンスの構造の二重性に現れるデュアリティや相対性といった概念を、モダニティのグローバリゼーション論のなかでどのように発展的に継承していくべきかについて、多くの示唆を与えてくれる。例えば、行為と制度は何を媒介にして総合されるのか、いろいろなヴァリエーションがあるなかで、知覚や、間身体的に共振する仕方でリズムを共有する相互行為などは、ひとつの可能性を示すものである。

また、行為と制度化を焦点に、モダニティのグローバリゼーション論といわゆる「東洋思想」の節合という観点にまで議論を広げてみると、鈴木大拙『無心ということ』（1955）も興味深い。鈴木が唱えた「無心」すなわち「無分別」であることは、ギデンスが批判した、相対性が相対主義の陥穽に嵌りがちであることを、存在論的な見地から救い出してくれる。すなわち、存在論的に〈生〉にかかわる行為は、本来的に脆弱性（vulnerability）を抱えるがゆえに、その復元力（resilience）を必要とする。この復元力を支えるのが制度や構造である。それゆえ、

行為と制度（構造）は、存在と認識の統一に媒介されて、双方がむしろ「無分別」の状態にあると捉えたほうが、何かしら重要な知見を私たちにもたらしてくれるはずである。

あるいは、議論の飛躍があることを承知の上で、敢えて存在論と認識論の融合が、モダニティのグローバリゼーション論にとって多くの可能性を秘めていることをイメージしようとすれば、量子力学でいう「無」という状態もまた、ここでの議論にとってはたいへん興味深い。すなわち、「無」とは何も存在しないという意味ではなく、真空の中から一対の粒子と反粒子が生まれ、それらがすぐに結合して消滅する運動を繰り返しているものとして説明される。すなわち、生成した粒子と反粒子が素早く結合するので、何もないかのようにみえる。この「無」の顰に倣っていえば、グローバリゼーションでは、存在論的に〈生〉とかかわる行為と、その復元力を支える制度や構造は、相対性のなかでの結合と分離を、ほぼ相即不離に近い形で繰り返すというように捉えることができる。存在論的に〈生〉にかかわる行為が、価値や規範といった創発特性の制度化と「無」的につながることをメタ理論とすれば、そうしたメタ理論に支えられたモダニティのグローバリゼーション論は、価値や規範がいわゆる現存の領土的な“社会的”価値や規範であることを超えて、脱領土的な（そして、その一部がグローバルな）価値や規範となっていく過程を、つぶさに照らし出してくれるかもしれない。

注

(1) 森川裕二『東アジア地域形成の新たな政治力学』（2012）は、本稿の議論に対して多くの示唆を与えてくれたことを明記しておきたい。「モダニティのグローバリゼーション論」において、相対性（relativity）や二重性（duality）、reflexivity（再帰性）や dialectic（弁証法）の概念がもつ可能性を問い直すとともに、鈴木大拙や西田幾多郎、あるいは京都学派の精神を反映しているともいえる量子力学とも関連させながら、認識論や存在論に遡及しつつ社会学の方法規準を再構想していく着想は、森川の所論より得た。

(2) 本文中の（2）「空間軸上におけるモダニティの変容」（モダニティの外発的発展論）と、(a)「モダニティの諸制度を形作る支配的な力の解明」、および（b）「モダニティの基盤となる複数の制度特性とその相互関係の解明」との交叉から確保される分析視角に基づいて、日本の政治的モダニティや親密圏のモダニティ（家族制度）を考察したことがある（首藤 2008, 2012, 2013）。しかし、本文中の（1）、（2）、（3）、および、(a)、(b) のマトリックスから構成される分析視角を総合的に生かしつつ、グローバリゼーションを歴史と比較の視点から掘り下げて理解するには至っていない。今後の課題である。

(3) 自他の共時化の「自覚的体験」については、梅村麦生（2016）より示唆を得た。

参考文献

Durkheim, Emile, [1895] 2004, *Les règles de la méthode sociologique*, Presses universitaires de France. （＝1978，宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波文庫.）

Giddens,Anthony, [1976] 1993, *New Rules of Sociological Method*, Second ed. Polity Press.（＝1987，松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法規準』而立書房.）

Giddens,Anthony, 1979, *Central Problems in Social Theory*, Macmillan.（＝1989，友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社.）

Giddens,Anthony. , 1990, *The consequences of modernity*, Stanford University Press.（＝1993，松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か？』而立書房.）

厚東洋輔，1995,「ヴェーバーのアジア社会論の射程と限界」『思想』849，38-60.

厚東洋輔，2006,『モダニティの社会学』ミネルヴァ書房.

厚東洋輔，2011,『グローバリゼーション・インパクト』ミネルヴァ書房.

Merleau-Ponty, M., 1942, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard.（＝1967，竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学１』みすず書房，＝1974，竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳『知覚の現象学２』みすず書房.）

森川裕二，2012,『東アジア地域形成の新たな政治力学』国際書院.

西原和久，2003,『自己と社会』新泉社.

Parsons, Talcott, 1949, *The Structure of Social Action*, Free Press. （＝1976，稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造１　総論』木鐸社，＝1986，稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造２　マーシャル・パレート論』木鐸社，＝1989，稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造３　デュルケーム論』木鐸社，＝1974，稲上毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造４　M．ウェーバー論（Ⅰ）』木鐸社，＝1989，稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造５　M．ウェーバー論（Ⅱ）』木鐸社.）

Parsons, Talcott. , 1951, *The Social System*, Free Press.（＝1974，佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.）

塩原勉，1985,『社会学の理論Ⅰ』放送大学教育振興会.

Shütz, A., 1932=2004, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Konstanz: UVK. （＝2006，佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成（改訳版）』木鐸社.）

首藤明和，2008,「日本のハイブリッドモダンの特徴と課題」『フォーラム現代社会学』7，8-16.

首藤明和，2012,「ハイブリッドモダンの日中比較研究序説」『日中社会学研究』20，9-20.

首藤明和，2013,「日中家族制度比較研究」首藤明和・王向華・宋金文編『中日家族研究』浙江大学出版社，401-428.

首藤明和，2017,「雲南保山回族にとっての国家」櫻井義秀編『現代中国の宗教変動とアジアのキリスト教』，北海道大学出版会，323-347.

鈴木大拙，［1955］2007,『無心ということ』角川文庫.

梅村麦生，2016,「Ａ．シュッツの同時性論」『社会学評論』266，166-181.